

テトラポットに札束を ～ネット起業家・和佐大輔の挑戦～



本書は2006年春に頒布された

「テトラポットに札束を～18歳ネット起業家・和佐大輔の挑戦～」
を一部加筆したもので、
これをもって和佐大輔氏の略年譜に
代えさせていただくものである。

～プロローグ～

13歳の夏。

少年は、近くの浜で家族や親戚とバーベキューを楽しんでいた。

「なあ、あの沖のテトラポットのとこまで行かへんか～？」

ひとしきり食べ終わって落ち着いたころ、親戚のひとりが少年に言う。

「うん、行こかー」

少年もすぐにうなずく。

「ふう～、やっと着いたな～」

積み重なったテトラポットのでっぺんにたどりつくのは思った以上に手間がかかった。

でも、ここに来た目的はそのつぎの行動にあったので、休むことはしなかった。

「よし、こっから海い飛び込もかー」

親戚の言葉に少年も、

「うん、飛び込もー」

さっそく、ふたりは体勢をととのえる。

もちろん、頭からまっさかさまに飛び込むための…

「ほな行こか」「よーし」

「せーのおーっ！」

この時こそ、ネット起業家・和佐大輔誕生の瞬間であった。

一. 危なっかしいガキ

今から 20 年前、大輔は地元で釣り道具の製造を営む和佐家の四男として生を受けた。

男ばかりの兄弟の末っ子。

それだけでもやんちゃの素質は十分なのに、生まれ落ちたところが高知県でも指折りの「超ド田舎」。漁師町で、海あり山あり、自然には事欠かない。この環境との相乗効果で、大輔は家族の予想をはるかに超える危なっかしいガキへとすくすくと育っていった。

山も川も海も、いつも友達だった。

山の上にはテレビの電波塔が立っている。

一つは高さ 10 m。もう一つは 20 m。

10 m の塔なら多くの仲間がのぼっていたが、20 m のほうはさすがに怖くてみんな敬遠していた。

だから、大輔はのぼった。

まわりから「すごい」と思われたい。その一心だった。

塔の内側に組まれているハシゴをのぼる。もちろん、命綱なんてない。落ちたら命がないことを知りつつ、それでも大輔は「すごい」と思われたいほうを優先した。

上に行くにつれ、風は強くなり、その風で塔もゆらゆらと揺れる。

それはちょっと怖かったが、大輔は見事のぼり切る。

てっぺんから見る景色は最高だった。

川には、アユやテナガエビが泳いでいる。

そいつを銚(もり)でひと突きしては、自分で焼いて食べていた。

川の上に線路がある。

そこに立ち、電車がやってくるのを待つ。

やがて電車がせまってくる。

タイミングをはかりながら、衝突ギリギリのところで川に飛び込む。

いかに電車と至近距離までいられるかが勝負だった。

電車の運転士も、その現場でいつも目にする大輔には警笛を鳴らさなかった。

海に飛び込むのも日課だった。

彼の住む町の防波堤は津波対策のために、高さが 20 m 以上もあった。

その高さが好きで、いつもガンガン飛び込みまくっていた。

とはいえ、そんな高さから飛び込んだのも、仲間内では大輔がいちばん最初だった。

海ではサザエも獲ってくる。

ある日、獲ったサザエをかかえて海沿いを歩いていると、それに気づいた観光客が「そのサザエ大っきいなー、いくらすんの？」と聞いてきた。

いつもなら市場に行って、友達のおばあちゃんの売り場の横に台を設け、皿に盛って売る。

でも、ワル知恵のよく働く大輔は、これはチャンスとばかり、市場に売るより高い値段をふっかけてみた。

それでも客は買ってくれた。

「うわ…高こうしても買ってくれたでー…」

彼のビジネスの原点ともいえるこんな出来事も、小学校低学年の頃の話だ。

勉強は大嫌いだった。いつも山や川や海へ行っていた。台風の日でさえ泳いでいた。

そんな自由奔放な大輔には、病気もケガも寄りつかなかった。

しかしその分、やらかした時はこれ以上ないほどド派手だった。

和佐大輔。小さくまとまらない男である。

二. 最初のケガは「頭蓋骨陥没骨折」

小学5年のある日。

町の余興があつて、大輔は浜辺にあつた漁協の建物の2階にいた。
ふと下を見ると、その建物の横に、網が積み上げられていた。

「クッションになるから大丈夫やな。飛んでみよー。」
すぐにそんなことを考えるのが大輔だった。

網がクッションになるから大丈夫…彼のその判断は正しかった。
ただし、ちゃんと網に向かってダイブしたらの話だ。
彼のダイブは、網を外した。

頭蓋骨陥没骨折。ヘタしたら死んでいた。
しかし、奇跡的に1ヶ月ほどの入院で復活。
それが、彼の人生で初めてしたケガだ。

和佐大輔。気絶するほどすさまじい男である。

三. 2度目のケガは…

そんなケガをしても、大輔の辞書に「恐怖心」という言葉が追加されることはなかった。根っからのやんちゃ坊主。そのせいで、彼は2度目のケガを引き起こしてしまう。そう、プロローグに書いた「せーのおーっ！」のつづきである。

その瞬間の記憶は、彼にはまったくくない。

気がつけば病院で寝ていて、ほどなく下半身が不随になったことを医師から聞かされた。

ただそれだけだった。

海にはちゃんと飛び込んだ。だが、飛び込んだところにテトラポットが突き出ていた。大輔の頭はそのテトラポットにちょうど 90 度、つまり真上から垂直にぶち当たったのだ。

あたりまえだが衝撃はすさまじく、より具体的には頸椎の第4・第5関節が一瞬にして圧縮され、押しつぶされてしまった。これを「頸椎損傷」という。

医師によると、もしもテトラポットにぶち当たる角度が少しでも斜めだったら、首の骨がまちがいなく折れて、絶対に命はなかったらしい。

またしても大ケガ。またしても、頭。一度ならず、二度までも…

しかし神は、このときも大輔をあの世に連れて行かなかった。

その代わり、失った体の機能を補って余りある才能を与えるのだが、彼や彼の家族がそれに気づくまでには、このあと5年ほどかかることになる。

和佐大輔。運のいい悪いが微妙な男である。

四.「テキトーですよ、テキトー」

こうして大輔は晴れて「第1級身体障害者」となった。

今まで動いていた足はもう動かない。その現実を突きつける車椅子。そして、それまで縁のまっただくなかった「リハビリ」…

結局はいつか「くよくよしてもしかたないから前を向いて生きよう」という気持ちになっていくのだろうが、この現実を知ったすぐというのは、それまで五体満足だった人間なら誰でもショックで、しばらく立ち直れないのではないだろうか。

しかし大輔は笑いながら言う。

「そなん、(ショックも)なんもなかったですよ〜。

あ、そう？って感じ。

だいたいボクいつもテキトーやから(笑)。

なんでもテキトーですよ、テキトー。」

そんなわけはないだろう？ そう思ってもう1回聞いてみたが、彼の答えは変わらなかった。

予想外の言葉にあわてつつ、「でも、さすがに家族はショックだったのでは？」と、矛先を変えて、大輔の世話係を務める2番目の兄に聞いてみる。

しかし、その兄までも「別に…」と言う。

彼らには、「ショックが全くないといえバウソになるけど…」ぐらいの言葉を期待していた。というか、疑いなくその言葉を待っていた。なのに、「なんもなかった」「別に…」って…それなら2人とも超人ではないか。

いや、そんなことを2人に言わせる和佐家自体が超人家族ではないか！

なぜ、ショックなんてないと言い切れるのか。

あっさり超人だと片付けることに抵抗したくて、ショックがないと言わしめる何らかの原因を必死にさがしたところ、大輔の言ったこの言葉に行き着いた。

「テキトー」。

彼はこの言葉を「いい加減」という意味で言ったのかもしれない。でもなんとなく、そのように解釈するのが不自然な気がして、改めて辞書を引いてみた。

そこには

「ある性質・状態・要求にちょうどよく合うこと。または度合いがちょうどよい状態」と出ていた。

英語で言えば「adjust」「fit」ということだろうか。

ともかく、何事においてもそのときの状態にうまく合わせていく。それを大輔は「テキトー」と表現したのだという仮説を立ててみた。そう、ちゃんと漢字で「適当」と書くとわかりやすい。

「いつも適当」だったので、

“ショックを受ける前に、すでに彼は自分の体の変化に気持ちを「適当に(＝ちょうどよく)」合わせることができていた。”

“サザエを観光客に売ったときも、その突然のオファーに対し、すぐさま「適当な(＝ちょうどよい)」値段を提示できた。だから売れた。”

こう考えればしっくりくる。

ちなみに、ネット起業家として快進撃を続ける今もなお、大輔は自分の行動を「いつも適当」と言い続けている。この不思議さえも納得できる。

つまり、「いい加減」じゃないほうの「適当」。

それなら確かに、ショックがなかったのもうなずける。

でも結局、子供の頃からそんな芸当ができていた大輔はやっぱ超人だと思ってしまふのだが…

和佐大輔。どこまでも適当な男である。

五.「なんも考えてなかったですよー」

車椅子生活となった大輔は、名古屋の病院でリハビリを開始する。そこには院内学級というのがあって、勉学も同時に進められるのだ。

とはいえ、やはり学校の勉強には興味がなかった。

マンガを読む。テレビを見る…どこにでもいる、きわめて普通の中学生だった。

変わったのは、身動きしづらくなった分、やんちゃをしなくなったことぐらいだ。

その後、普通の学校に通えるまでになった彼は、中学3年のとき、地元・高知の中学に復学。

そして推薦入学で、公立高校の総合科へと進学する。

その高校は県のバリアフリー指定校だったのだが、工事はまだ始まったばかりで完成までに1年近くかかる予定だったのと、大輔自身、もう少し自助生活をレベルアップさせたい気持ちがあって、入学早々ではあったが1年間の休学を申請。その間、彼は神戸のリハビリ専門病院と、隣接する自立支援施設でそれぞれ半年ずつを過ごすことになる。

「リハビリしてた頃は、ほんと、なんも考えてなかったですよ。基本的にボク、テキトーやし(笑)。ただ普通に毎日が過ぎていったというか…」

リハビリをしていたという事実以外、名古屋～神戸の生活を経て高校に復学するまでの大輔は文字通り「空白の数年間」だったようだ。

「なんも考えてなかった」時期が数年間。

今の彼は、まるでそれを埋め合わせるようにいろんなことを「適当に」考え、多忙を極めているので、神はその人の人生をちゃんとバランスよくするのだな、とつくづく思ってしまう。

和佐大輔。空白の恩恵を受けた男である。

六. ネットビジネスとの出会い

超自然児の大輔だったが、一方で、インドアのものにもはまっていた。

「遊戯王」のカードなどは、ゲームするのはもちろんのこと、自分の部屋でながめて
いるだけでもすごく楽しくて、時間を忘れてしまうこともしょっちゅうだった。

そして、小学6年のときにはパソコンをいじり出した。

家業の財務を担当している母親が使っていたのだ。

最初は「ぎゃ」という文字がどう打てば出てくるのかわからずにつまずいた。しかし、
興味本位でいろいろいじっているうちに自然に覚え、いつしかヤフオクの画面ぐら
いは見れるようになっていた。

なぜヤフオクの画面を見たかったのか？それは大輔の母親がかなり進んだ人で、
当時からヤフオクでいろんなものを購入していたからだ。田舎には売ってないようなも
のが買えることに魅力を感じていたらしい。

しかし、当時の回線はISDN。

いつまでもネットに接続して夢中になっている大輔を、母親が「もうそのくらいにしと
き」と引き止めることもしばしばだった。

その後、車椅子生活になり、「なんも考えてなかった」大輔を気遣って、母親は彼の
ためにパソコンを1台追加した。動き回れない生活だったこともあり、大輔がパソコン
に向かう時間は格段に増えた。それでも彼がパソコンで主にやっていたことは、それ
までただ見ていただけのヤフオクで、ほしいものを買うというぐらいの進歩でしかなか
った。

そんな大輔が、ヤフオクで「あること」に気づいたのは、2005年1月のことだった。

その前年の春、神戸でのリハビリを終えた大輔は地元・高知の高校に復学していた。
最初の1年を休学したので、その年に入った、彼から見れば1年下の新入生とともに、
高校生活を改めてスタートさせた。

しかし、勉強が嫌いだった大輔にとって、学校はまったくおもしろくなかった。

つまらない。意味がわからない。めんどくさい。どんな授業もそんな感じだった。何
のモチベーションもなかった。

かといって、学校をやめたところではない。だから今はただ、それこそ「テキ
トーに」やりすごそう。そう思っていた。

とにかく、卒業はしよう。卒業したら、将来はパソコンがなんとなく役立ちそうだから、

パソコンの専門学校にでも行けばいいや。だから、コースが選択できる2年生になったらパソコンのコースを選ぼう。

ただそれだけのために、大輔は高校で、まったく味気ない毎日を過ごすという犠牲を払いつづけていた。

そうしてほとんど無意味な年を越し、迎えた2005年1月のある日。

大輔がヤフオクで気づいた「あること」とは、そこに「情報」というカテゴリーがあることだった。見てみると、そこには「これをやれば儲かる」といった内容の情報が紹介されていた。

「へー、情報なんて売れるんやー。でもこれ、ホンマに儲かんのか？」
そう思いつつも、彼の心は確実に動いていた。

というのも、彼はつねづね「お小遣いがほしい」と思っていたのだ。
お年玉はもらえたが、毎月のお小遣いはなかった。
欲しい本などは、言えば親が買ってくれるが、自分の自由にできるお金がなかった。
それがほしかった。アルバイト程度の額でいい、とにかく「自分のお金」が。

そんなとき、目に飛び込んできた有料情報。
「この情報を買えば、お小遣いが入る！」
大輔は思い切って、もらったばかりのお年玉でその情報を買った。
結果はいわゆる「ゴミ情報」。だまされた。

しかし、これがきっかけで大輔は「ネットで収入が得られる」ということに興味を持ち始める。

「これなら障害者の自分でもやれる。稼げるかもしれない。」
そう思ったとき、すでに大輔は行動しはじめていた。1月下旬のことである。
最初的手段として、彼は慣れ親しんだヤフオクで初めて「売る側」に回った。
決済口座としての e-bank の存在もそこで初めて知った。
取り扱ったのは、パソコンのパーツだった。
ネットで調べて、安く仕入れられるところを見つけた。
それを出品してオークションにかける。
商品の梱包は友達に頼んだ。
そのときはすでに落札者から入金されているから、そこから友達にバイト代が出せた。

1ヶ月もしないうちに、大輔はすでに20万ほどの小遣いを手にしていた。
「ネットってこんなに簡単に稼げるんやー…」
ラクに20万。またたく間に20万である。楽しくないわけがない。
それに、e-bankにログインして残高が増えている画面を見るのがおもしろかった。
入金があるとケータイに通知が来る。
つまらない授業中にケータイが震えて、それが入金通知だったときが最高だった。

こんなに楽しいことは、車椅子生活になってからは出会うことがなかった。
それからは当然のごとく、彼はますますヤフオクにのめりこんでいった。

ところが、彼のヤフオク生活は3ヶ月ほどで終焉する。
落札されなくなってきたのだ。
すると大輔は、ヤフオクは潮時と早々に手を引き、その少し前に知った「アフィリエイト」を本格的にはじめた。やってみたら、これもたまたま楽しくかった。

やりたいことが見つかった以上、もともとつまらなかった学校にはもう用はなかった。
1分1秒でも、アフィリエイトに没頭したかった。
そんな大輔を間近に見ていた家族は、彼の高校中退をむしろ歓迎した。
もう、彼を止めるものは何もなくなった。

和佐大輔。水を得た魚を地で行く男である。

七. たった1年で一気に加速！

「楽しくてたまらない」ということは、これほどまでに成長を加速させるものなのか。

5月以降、大輔は情報商材や物販アフィリエイトで毎月最低でも30万以上を稼ぐようになった。

さらに7月には、自身の独自のアフィリエイト手法をまとめたe-book「トップを狙え」を発表し、月収は70万を突破。翌月には、とうとう月収が100万をこえた。

そして12月。

大輔は自身がアフィリエイト媒体として使っていた「ブログ」をテーマに、ゼロからブログを立ち上げ、アフィリエイトができるまでをかみくだいて説明した「ブログ解体新書」を発表する。

原稿作成に要した期間はのべ1ヶ月。それまで長い文章を書くことなど絶対にやらなかった大輔が、やっていて楽しいという理由だけで、夢中になって書き切ってしまった。まったくの初心者向けなので、事細かに説明しなければならない。だから書くことが増えるし、きわめて丁寧な解説が要求される。それでも、彼は書くことに没頭できた。その結果がA4判で300ページ以上もある渾身の作。出来上がったとき、こんなに書いたんだと自分でもびっくりした。

そんな自信作を、彼は自分が考えついた独自の販売戦略で売りまくり、発売1ヶ月で月商1,231万円という驚異的な数字をたたき出してしまう。その後も2ヶ月で2,000万超え、3ヶ月で3,000万超えを達成。月平均1000万以上を売り上げる非常識な18歳になってしまったのである。

お気づきだろうか。

ヤフオクをはじめてから月商1,000万超えまで、たったの1年しか経っていないのだ。

和佐大輔。大ブレイクにも程がある男である。

18歳。高校中退。元ニート。車椅子生活にしてスーパーネット起業家。

そんな彼を、他の起業家が放っておくわけがない。

2006年3月。

「超ド田舎」とは対極の町、東京・渋谷で、大輔は初のセミナー講師を務めた。

自分の車椅子姿を一般の目にさらすことになったのだ。

「こんな人間でもやれる。頑張れば稼げる」ことを身をもって示し、この1年の軌跡を

語る姿は集まった参加者の心を確実に動かした。

それまで、自分の車椅子生活を公表するなんて思ってもいなかった。まして、人前で話すことなどまったく頭になかった。

しかし、圧倒的な結果を出してしまったことで状況は一変。期せずして、人と会う機会がどんどん増えていった。

正直、自分の身体の状態をさらけだすのは葛藤があった。

でも、近々会うことがわかっている人に、自分の姿を言わないのは不誠実な気がした。

だったら、もう言ってしまうおう。

そう思って、彼は前もって、自身のメルマガで車椅子姿であることを伝えた。

反響はすごかった。そのどれもが応援・励ましの声。思い切って告白してよかったと思った。

八. リアルとネットの違い

そして4月。

大輔は驚くべき売上をたたき出した販売戦略を軸に、今度はネット起業家の育成に乗り出した。

名づけて「情報起業家育成スパルタ強化合宿」。「スパ強」の俗称で親しまれ、4ヶ月以内に月収50万円以上稼げなければ受講料は全額返金という、それまで誰もやっていなかった完全成果保証型の育成プログラムだ。

なぜ、月収1,000万以上稼ぐ男が月収50万を稼がせるためにここまで熱くなったのか。それはビジネスの本質をつかんでいたからに他ならない。その50万までの道のりなくして月収1,000万などありえないことを身をもって知っていたのだ。

ある日突然ドカンと稼げたわけじゃない。

大きな結果ばかり夢見ていないで、その結果を出すために目の前の一歩から地道に歩んでほしい。その思いを大輔は「スパ強」に込めていたのだ。

当時流行していた塾は、いきなり大きな金額が稼げるようにうたわれていたものがほとんどで、しかも、そのとおりにならなければ返金するといったものもなかった。「スパ強」は、その状況に対する大輔の反骨心の表われだった。(ちなみに「スパ強」には、その直前に知り合った木坂健宣をスーパーバイザー「Mr. K」として迎え入れていた。)

このようなことから明らかなように、大輔は単に運が良くて稼げた男でない。そもそも大輔には、ネットで稼ぐということにおいての確固たる持論がある。

「ネットだからといって、何も変わったことをやる必要はない」。

要するに、リアル(ビジネス)で普通にやっていることをネットでやればいいだけ。

それだけで「必然的に」売れる。そんな、非常にシンプルな発想に基づいて展開されているのだ。

それは、大輔の実家が釣り道具製造というリアルビジネスをやっていて、それを見て育った影響が大きい。

リアルは大変だ。でも、それをネットでやれば、ラクにできる。楽しくできる。

だから大輔は、ネットに幻想を抱いてはいない。普通のビジネスを効率化するツールとしてしか見ていないのだ。

それは今でも同じである。

互いにウマが合った木坂健宣とは「スパ強」が終了してからも「ICC」(2007年2月

～2008年4月)、そして「ネットビジネス大百科」(2007年5月～)、「History」(2007年12月)、「ネットビジネスアーカイブ(NBA)」(2008年4月～)とプロジェクトを進めていったが、リアルでやることをネットでやるだけという考え方には全くブレがない。そのことは、右記のプロジェクトの中身を少しでも知っている人ならわかるはずだ。

九. 神が与えたもの

2005年以降、家族を驚愕させ、あわてて法人を作ったほどにネットビジネスを加速させた和佐大輔。彼の才能を語るとき、やはりあの13歳の夏の出来事を振り返らずにはいられない。

大輔は言う。

「テトラポットに頭ぶつけた瞬間、自分でもようわからんけど、きっと six sense が目覚めたんとかうかなあ？」

頭蓋骨に穴を開けると脳ミソの圧が変わり、人間がもともと備わっている能力が目覚めるらしい。また、宇宙に行くと脳ミソが開放されて、いままで使われてなかった潜在能力が目覚めるそうで、その能力を彼は six sense、つまり「第六感」と表現した。

なるほど。

あの瞬間、テトラポットは神だったのだ。

神の使命で、彼の six sense を、そこで目覚めさせたのだ。

そう、両足の自由と引き換えに…

そして、大輔はこれからも、自身に課した目標と使命に向けて、試行錯誤しながら挑戦を続けていく。もちろん「テキトーに」。

～エピローグ～

その 20 歳のネット起業家は、13 歳の夏に起こったあの出来事の現場にたたずんでいた。

それまでテトラポットに何の感情も持ったことはなかったが、これに頭をぶつけなかったら今の自分はなかった…そう思うと妙に親近感がわいて、会いたくなったのだ。

「少し分け前をやろう。」

彼はしのばせてきた「あるもの」を取り出して、世話係である2番目の兄に頼んでそれをテトラポットの上に置いてもらった。

それは「札束」だった。